WIENER SYMPHONIKER

Omer Meir Wellber, Conductor

Japan Tour 2024

ウィーン交響楽団

指揮：オメル・メイール・ヴェルバー

2024年 日本公演

ARTIST SUPPORT

【アーティストサポート】を通して、アーティストたちの活動をご支援いただき、ありがとうございます。
時や国を超え「生きる力」を与えてくれる文化・芸術に、引き続きのご支援をお願い申し上げます。

ご支援をいただいた個人ならびに企業・団体の皆さま

＜2023年度年間サポート＞

F.A　E.A　Y.A　T.I　井上 豊　今井良成　S.U　植原由起子　S.U　M.E　A.O　K.O　S.O
片山由美子　E.K　河村はるみ　K.K　木村美明　M.K　小室秀夫　N.S　新貝康司　鈴木健二　N.S　M.S
関根一禄　A.D　田中治郎　土屋涼子　トゥルーラブ真智子　トゥルーラブ真凛　N.N　中島 和　中野和枝
中村尚義　中村美穂　新倉啓介　T.H　樋口美枝子　N.H　M.H　平山美由紀　藤野盾臣　細沼康子　M.H
松尾芳樹　松田 香　S.M　真野美千代　三橋祐太　J.M　H.M　H.Y　S.Y　渡部伸子
TDK株式会社　MEDIHEAL & SEKIDO　コンツェルトハウス・ジャパン by 株式会社キタマ
株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント　株式会社ロジックアンドエモーション
ライフプラン株式会社　Heart of the Earth株式会社
ナレッジワーカーズインスティテュート株式会社　株式会社RINABO　きづきアセット株式会社
株式会社青林堂　日本パデレフスキ協会淡路
（匿名希望 34名）

＜ショパン・ピリオド楽器プロジェクト＞

S.O　北村眞　トゥルーラブ真智子　平山美由紀
（匿名希望 5名）

＜舘野泉バースデープロジェクト＞

Y.A　阿部将任・登美子　新井京子　池田光世　一柳吉子　A.I　遠藤一秀　大嶋早苗　大嶋浩美
大谷恵美子　S.O　奥田三華　小畑裕子　木全恵美子　久保春代　M.K　黒川智恵美　黒住彰子
斉藤久子　坂井和　佐々木暁子　菅原佳世子　鈴木早苗　R.T　田口雅子　田邉英利子　土谷美保子
永作稔　中村恭子　中村康江　K.H　羽生賢次　林雄嗣・鈴子　福島晶子　堀田高秀　松田純子
三上美智恵　光永育　K.M　山家七恵　S.Y　K.Y　吉岡玲子　吉田和充・淳子
舘野泉ファンクラブ東京　舘野泉ファンクラブ東北　タビオラの会　日本セヴラック協会　有限会社ムジカーザ
NPO法人 Mプロジェクト　スオミ・ピアノ・スクール研究会
（匿名希望 20名）

＜ニュークラシックプロジェクト＞

淺岡尚子　岩井睦雄　上原啓子　小田島容子　K.K　久保千聖　雲然祥子　小池美喜　篠崎啓史　I.S　T.S
トゥルーラブ真智子　トゥルーラブ真凛　T.N　長谷部 宏行　秦 勝重　T.H　林 路郎　細沼康子　牧野佳那
松下泰之（マティビ）　S.Y
（匿名希望 14名）

2024年3月1日現在　敬称略

ご支援についての詳しい内容は、どうぞ下記へお問い合わせください。
株式会社ジャパン・アーツ アーティストサポート係 Tel.03-3499-7720
（平日11:00～17:00 年末年始を除く）

アーティストサポートの詳細はこちらをご覧ください。

3月13日（水） 19:00　東京　サントリーホール
March 13 Wed. 19:00　Tokyo　Suntory Hall

ブラームス: ピアノ協奏曲第1番 ニ短調 Op.15（ピアノ：河村尚子）
J. Brahms: Piano Concerto No.1 in D minor, Op.15　(Piano: Hisako Kawamura)

第1楽章： マエストーソ	1st Mov.: Maestoso
第2楽章： アダージョ	2nd Mov.: Adagio
第3楽章： ロンド、アレグロ・ノン・トロッポ	3rd Mov.: Rondo. Allegro non troppo

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ブラームス: 交響曲第1番 ハ短調 Op.68
J. Brahms: Symphony No.1 in C minor, Op.68

第1楽章： ウン・ポーコ・ソステヌート － アレグロ	1st Mov.: Un poco sostenuto − Allegro
第2楽章： アンダンテ・ソステヌート	2nd Mov.: Andante sostenuto
第3楽章： ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ	3rd Mov.: Un poco allegretto e grazioso
第4楽章： アダージョ － ピウ・アンダンテ	4th Mov.: Adagio − Più andante
－ アレグロ・ノン・トロッポ・マ・コン・ブリオ	− Allegro non troppo ma con brio

オメル・メイール・ヴェルバー指揮 ウィーン交響楽団 2024年日本公演

3月13日（水）	東京	サントリーホール	主催：ジャパン・アーツ ★
3月14日（木）	東京	サントリーホール	主催：ジャパン・アーツ
3月15日（金）	西宮	兵庫県立芸術文化センター	主催：兵庫県、兵庫県立芸術文化センター ★

★ ピアノ：河村尚子

3月14日（木） 19:00　東京　サントリーホール
March 14 Thu. 19:00　Tokyo　Suntory Hall

ベートーヴェン: 交響曲第8番 ヘ長調 Op.93
L. v. Beethoven: Symphony No.8 in F major, Op.93

第1楽章： アレグロ・ヴィヴァーチェ・エ・コン・ブリオ	1st Mov.: Allegro vivace e con brio
第2楽章： アレグレット・スケルツァンド	2nd Mov.: Allegretto scherzando
第3楽章： テンポ・ディ・メヌエット	3rd Mov.: Tempo di Menuetto
第4楽章： アレグロ・ヴィヴァーチェ	4th Mov.: Allegro vivace

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ベートーヴェン: 交響曲第7番 イ長調 Op.92
L. v. Beethoven: Symphony No.7 in A major, Op.92

第1楽章： ポーコ・ソステヌート － ヴィヴァーチェ	1st Mov.: Poco sostenuto − Vivace
第2楽章： アレグレット	2nd Mov.: Allegretto
第3楽章： プレスト	3rd Mov.: Presto
第4楽章： アレグロ・コン・ブリオ	4th Mov.: Allegro con brio

主催： ジャパン・アーツ
後援： オーストリア大使館　オーストリア文化フォーラム 東京
オーストリア政府観光局　オーストリア

オメル・メイール・ヴェルバー（指揮）

Omer Meir Wellber, Conductor

オメル・メイール・ヴェルバーは、オペラ及びオーケストラのレパートリーにおいて、現代を代表する指揮者の一人としての地位を確立している。彼は現在、パレルモ・マッシモ劇場の音楽監督を務めるほか、長きにわたる交流からイスラエルのラーナナ・シンフォニエッタの音楽監督も務めている。2025／26年シーズンからは、ハンブルク州立歌劇場の音楽総監督兼首席指揮者及びハンブルク州立歌劇場フィルハーモニー管弦楽団の音楽総監督に就任することが決定。また、ウィーン交響楽団のほか、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、NDRエルプフィルハーモニー管弦楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、ベルリン放送交響楽団、チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団などに定期的に客演し、ウィーン響とは2022年秋にヨーロッパ・ツアーも行っている。さらにはオペラ指揮者として、ウィーン国立歌劇場、メトロポリタン・オペラ、ブレゲンツ音楽祭、グラインドボーン音楽祭などにも登場。2010年には、サイトウ・キネン・フェスティバル松本における「サロメ」の指揮で、小澤征爾の代役を務めている。

2009年より音楽監督を務めるラーナナ・シンフォニエッタとの共演は、彼の母国イスラエルとの親密な関係性を物語っている。ドレスデン国立歌劇場との長年のコラボレーションの結果、2018年から22年の間、首席客演指揮者として活躍。BBCフィルハーモニックの首席指揮者としても、ブリッジウォーター・ホールでのコンサートやBBCプロムスに加えて、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭などに出演している。また、2010年から14年にはバレンシアのソフィア王妃芸術宮殿の音楽監督、2008年から10年にはベルリン国立歌劇場とミラノ・スカラ座にてダニエル・バレンボイムのアシスタントを務めた。さらに彼は、パルマのトスカニーニ音楽祭で音楽監督を務め、ウィーン・フォルクスオーパーの音楽監督も数年務めている。

1981年イスラエルのベエルシェバ生まれ。アコーディオン、ピアノを5歳で始め、エルサレム音楽アカデミーにて指揮と作曲を学ぶ。

彼は処女作の小説で文壇デビューを果たし、『Die vier Ohnmachten des Chaim Birkner』が2019年秋にBerlin Verlagより出版された。なお、この小説のイタリア語版、フランス語版、ヘブライ語版も出版されている。

ウィーン交響楽団

Wiener Symphoniker

伝統に培われた歴史と、独自のスタンスを貫く勇気や尽きることのない発見の喜びを持つウィーン交響楽団は、新世界のオーケストラであり、クラシック音楽の中心地ウィーンの鼓動のような存在だ。120年以上にわたりコンツェルトハウスとウィーン楽友協会で開催されているシンフォニック・コンサートにおいて、この街のユニークな音楽文化を特徴づける過去と現在、そして未来を融合させながら、唯一無二の存在となってきた。2025年、ウィーン響は創立125周年を迎える。

ウィーン響は、ブルックナーの交響曲第9番、シェーンベルクの「グレの歌」、ラヴェルの左手のための協奏曲、フランツ・シュミットの「7つの封印の書」など、音楽史上の道しるべとなった重要な作品を初演している。また、バイスル・コンサート、グレッツェル・コンサート、プラーター・ピクニックやアドヴェントにおけるシュテファン大聖堂での演奏など、街の中のさまざまな場所で開催するコンサート形式を創出し、ウィーンの都との距離を縮めている。

ヴィルヘルム・フルトヴェングラー、ハンス・スワロフスキー、ヘルベルト・フォン・カラヤン、ヴォルフガング・サヴァリッシュ、ジョルジュ・プレートルなどが同楽団を指揮。さらにはカルロ・マリア・ジュリーニやゲンナジー・ロジェストヴェンスキー、近年はファビオ・ルイージ、フィリップ・ジョルダン、アンドレス・オロスコ=エストラーダらが首席指揮者に名を連ねている。そして2023年にチェコ人の新鋭ペトル・ポペルカを首席指揮者に選出。ポペルカは2024／25年シーズン開幕と同時にその任務に就く。「私にとってウィーン交響楽団はウィーンの音楽そのものを体現しています」とポペルカは語る。「この街の精神をとらえて映し出すオーケストラであり、偉大な伝統をもつアンサンブルで、何よりもレパートリーと社会の中でのオーケストラの役割の双方において、常に近代的なパイオニア精神を発揮し全うしているオーケストラなのです」。

www.wienersymphoniker.at

PROFILE

河村 尚子（ピアノ）

Hisako Kawamura, Piano

ハノーファー国立音楽芸術大学在学中の2006年ミュンヘン国際コンクール第2位受賞。翌年、クララ・ハスキル国際コンクールにて優勝を飾り、大器を感じさせる新鋭として世界の注目を浴びる。

ドイツを拠点に、ヨーロッパ、ロシア、日本などで積極的にリサイタルを行う傍ら、ウィーン交響楽団、サンクトペテルブルグ・フィルハーモニー交響楽団、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団などのソリストに迎えられている。また室内楽では、ハーゲン・クァルテットの名チェリスト、C.ハーゲンとのデュオで好評を得ているほか、M.ホルヌング（チェロ）とロンドンのウィグモアホール、R.オルテガ・ケロ（オーボエ）とニューヨークのカーネギーホールにデビューするなど、同世代の実力派アーティストとも積極的な活動を展開している。

日本では、2004年小林研一郎指揮／東京フィルハーモニー交響楽団の定期演奏会でデビュー。以来、P.ヤルヴィ指揮／NHK交響楽団を含む日本国内の主要オーケストラと相次いで共演を重ねる一方、フェドセーエフ指揮／モスクワ放送交響楽団、ルイージ指揮／ウィーン交響楽団、プレトニョフ指揮／ロシア・ナショナル管弦楽団、ヤノフスキ指揮／ベルリン放送交響楽団、ビエロフラーヴェク指揮／チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、山田和樹指揮／バーミンガム市交響楽団などの日本ツアーに参加。そのほか、ノリントン、テミルカーノフ、ラザレフなど多くの指揮者から度々再演の指名を受けている。

主なCDには、「ショパン：ピアノ・ソナタ第3番＆シューマン：フモレスケ」、「ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番＆チェロ・ソナタ」、「ショパン：24の前奏曲＆幻想ポロネーズ」、「月光」「悲愴」「熱情」等を含む3枚のベートーヴェン・ソナタ集（以上RCA Red Seal）がある。また、国際ピアノ・コンクールにおける若者たちの群像劇をリアルに描いた、作家・恩田陸の直木賞受賞小説を原作とした映画『蜜蜂と遠雷』（2019年10月公開）において主人公・栄伝亜夜のピアノ演奏を担当した。

文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞、新日鉄音楽賞 、出光音楽賞、日本ショパン協会賞、井植文化賞、ホテル・オークラ賞、2020年には第32回ミュージック・ペンクラブ音楽賞独奏・独唱部門賞、第12回CDショップ大賞2020・クラシック賞、第51回サントリー音楽賞を受賞。2024年はデビュー20周年を迎え、秋には20周年特別リサイタルツアーを行う。これまで、ウラディーミル・クライネフ、澤野京子、マウゴルジャータ・バートル・シュライバーの各氏に師事。現在、ドイツ・エッセンのフォルクヴァング芸術大学教授、東京音楽大学特任講師。

Hisako Kawamura,
Piano

WIENER SYMPHONIKER

WIENER SYMPHONIKER Japan Tour 2024

CONDUCTOR
Omer Meir Wellber

CONCERT MASTER
Dalibor Karvay*
Anton Sorokow*
Guillermo Büchler
Alexander Burggasser

1st VIOLIN
Stephan Achenbach
Christian Birnbaum
Monika Buineviciute
Maximilian Dobrovich
Franz Michael Fischer
Nicolas Geremus
Dorice Köstenberger
Martin Lehnfeld
Claire Nyqvist
Nikolay Orininskiy
Edwin Prochart
Eva-Maria Reisinger
Caroline Sigwald
Ge Song
Birgit Zalodek
Martin Zayranov
Aurora Irina Zodieru Luca

2nd VIOLIN
Dominika Falger
Matthias Honeck**
Libor Meisl
Elzbieta Sojka
Ioanna Apostolakos
Oliver Breuer
Christian Knaus
Elena Kodin
Helmut Lackinger
Mariam Margaryan-Petkova
Stefan Pöchhacker
Wolfgang Schuchbaur
Maiko Seyama
Agata Sikorska
Renate Turon
Barbora Valečková
Gerald Wilfinger
Alexandra Winkler

VIOLA
Paula Zarzo Rubio
Roman Bernhart
Vera Reigersberg
Natalia Binkowska
Michael Buchmann
Martin Edelmann
Werner Frank
Rui Hashiba
Christian Kaufmann
Karl-Heinz Krumpöck
Christian Ladurner
Wolfgang Prochaska
Paul Rabeck
Roland Roniger
Ulrich Schönauer
Isabella Stepanek

CELLO
Christoph Stradner
Michael Vogt***
Erik Umenhoffer*
Bence Temesvári
György Bognár
Maria Grün****
Michael Günther
Zsófia Günther-Mészáros
Anna Nagy
Andreas Pokorny
Christian Schulz
Alexandra Ströcker
Romed Wieser
Primož Zalaznik

CONTRABASS
Ivan Kitanovic
Ernst Weissensteiner
Carlos Aguilar Vargas
Hermann Eisterer
Ivaylo Iordanov
Martin Kabas
Dragan Lončina
Andreas Sohm
Helmut Stockhammer
Hans-Joachim Tinnefeld

FLUTE
Erwin Klambauer
Stefan Tomaschitz
Theresia Prinz-Mörth
Esther Gisler-Auch
Simona Pittau

OBOE
Ines Galler-Guggenberger
Paul Kaiser
Stefanie Gansch
Thomas Machtinger
Peter Schreiber

CLARINET
Gerald Pachinger
Reinhard Wieser
Alexander Neubauer
Manuel Gangl
Martin Rainer

BASSOON
Patrick De Ritis
Richard Galler
Robert Gillinger
Magdalena Pramhaas
Ryo Yoshimura

HORN
Peter Dorfmayr
Michael Stückler
Armin Berger
Josef Eder
Eric Kushner
Markus Obmann
Georg Sonnleitner
Gergely Sugár

TRUMPET
Andreas Gruber
Matthias Kernstock
Heinrich Bruckner
Christian Löw
Rainer Küblböck

TROMBONE
Martin Riener
Walter Voglmayr
Nikolaus Singhania
Reinhard Hofbauer
Wolfgang Pfistermüller

TUBA
Franz Winkler

HARP
Volker Kempf

Timpani
Dieter Seiler
Michael Vladar

PERCUSSION
Thomas Schindl
Martin Kerschbaum
Friedrich Philipp-Pesendorfer

The Wiener Symphoniker are grateful for loaned instruments from the following collections:
* Österreichische Nationalbank **Dkfm. Angelika Prokopp Privatstiftung
***Bank für Tirol und Vorarlberg AG ****MERITO Strings Instruments Trust

【3月13日】

ブラームス：ピアノ協奏曲第1番 ニ短調 Op.15

ヨハネス・ブラームス（1833−97）の初期の大作であるこの作品は、当初2台ピアノのソナタとして1854年春に書かれた。しかし彼はこれに満足できず、交響曲に書き直そうと第1楽章を管弦楽化した。だがそれでもまだ不満で1855年にピアノ協奏曲に改作することに決め、1858年2月、ピアノ協奏曲第1番として完成したのである。今日原曲の2台ピアノ用のソナタも途中段階のスケッチも消失しているため、協奏曲になるまでの過程を辿るのは不可能だが、原曲とはかなり異なったものになっていったのはたしかで、特に原曲のソナタの中間楽章は全く新しいアダージョに代えられた。

曲は交響的な広がり、大規模な構成、激しい疾風怒涛的な性格を特徴とし、恩人シューマンの自殺未遂と精神病院での死から受けた衝撃や、シューマンの妻クララに対する強い思慕の情など、激しく揺れ動く当時の青年ブラームスの感情を表出したかのような作品となっている。

第1楽章（マエストーソ）は協奏的ソナタ形式による大規模な楽章。管弦楽と高度な技巧を要するピアノが相拮抗するシンフォニックな響きのうちに劇的に発展する。**第2楽章**（アダージョ）はブラームス自身がクララの肖像と述べた緩徐楽章で、奥深い情感に満ちている。**第3楽章**（ロンド、アレグロ・ノン・トロッポ）は力強い主題を中心にダイナミックな展開を示すロンド・フィナーレ。最後は長大なコーダで輝かしく閉じられる。

ブラームス：交響曲第1番 ハ短調 Op.68

ブラームスが最初の交響曲の構想を抱いたのは初期の1855年頃だった。しかし崇敬する先人ベートーヴェンの偉大な交響曲に対する強い意識と生来の自己批判的な性格が相俟ってなかなか筆が進まず、長年にわたって多くの試行錯誤を繰り返しながら、自分なりに納得のいく交響曲のスタイルを模索していく。完成をめざしての創作にやっと自信を持って本腰を入れるようになったのは実に最初の構想から20年近く経った1874年頃のことで、1876年に交響曲第1番はついに実を結ぶこととなった。初演は同年に行われたが、その後ブラームスはさらに第2楽章に大幅な改作の手を入れ、現行の形に仕上げている。まさに労苦の結晶だけあって緻密に構築された交響曲で、その中にロマン的情感を豊かに湛えている点がブラームスらしい。

第1楽章（ウン・ポーコ・ソステヌート〜アレグロ）は緊迫した序奏に続き、闘争的な主部が劇的に展開する。**第2楽章**（アンダンテ・ソステヌート）は叙情に満ちた緩徐楽章。終りの部分では独奏ヴァイオリンとホルンが美しいデュエットを奏でる。**第3楽章**（ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ）は間奏風の楽章。**第4楽章**（アダージョ〜ピウ・アンダンテ〜アレグロ・ノン・トロッポ・マ・コン・ブリオ）は不安な緊迫感の漂う序奏で始まり、霧を晴らすかのようなホルンの響きと荘重なコラールを経て、明朗な主部に入る。晴れやかで力強いフィナーレである。

【3月14日】

ベートーヴェン：交響曲第8番 ヘ長調 Op.93

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770−1827）は1808年に交響曲第5番と第6番を完成させた後、しばらく交響曲のジャンルから遠ざかるが、1812年に4年ぶりに2つの交響曲を生み出した。交響曲第7番と第8番である。これら2つはどちらもリズムを作品構築の重要な要素としているが、作風は対照的で、中期の形式拡大の方向を受け継いだ第7番に対し、第8番は古典様式に戻ったかのような凝縮性を示しているのが特徴的である。

しかし一見古典様式に回帰したようにみえる第8番も、実は曲の構造、主題の扱い、転調の大胆さなど斬新な試みがなされており、生涯にわたって古典様式を超える新しい表現をめざしたベートーヴェンらしい革新性が示された作品となっている。リズムの根源的な力強さを打ち出した後述の第7番とは対照的に、第8番はリズムの軽快さを生かしており、全体にユーモラスな精神に満ちている。中間の2つの楽章を舞曲的な性格としていることにもこの作品の特質がよく現れている。

第1楽章（アレグロ・ヴィヴァーチェ・エ・コン・ブリオ）は快活なソナタ形式楽章。**第2楽章**（アレグレット・スケルツァンド）はメトロノーム風の刻むようなリズムが特徴的。**第3楽章**（テンポ・ディ・メヌエット）はアクセントの利いた力強いメヌエット。**第4楽章**（アレグロ・ヴィヴァーチェ）は変化とユーモアに富んだフィナーレで、とりわけ長大なコーダは諧謔的である。

ベートーヴェン：交響曲第7番 イ長調 Op.92

この第7番は1811年の終り頃に着手されたようで、翌12年に完成された（1813年初頭に推敲がなされたようだ）。すでに触れたように中期における形式拡大路線の延長上にある作品だが、中期に究めた徹底的な動機展開法をリズム動機に応用し、一定のリズム型の反復を生かしつつ、リズムの持つ推進力と躍動感を前面に押し出した作品となっているところがユニークである。

一方、後期への過渡期にあたるこの時期のベートーヴェンは、旋律のカンタービレを重視するようになっていた。この作品もリズムの躍動感を生かしながら、そこに旋律のカンタービレを存分に生かしている。交響曲第7番の特質は、このようにリズムによる統一法とカンタービレ豊かな主題の結び付きにあるといえよう。

第1楽章（ポーコ・ソステヌート〜ヴィヴァーチェ）は充実した序奏の後、木管の付点リズムに導かれてソナタ形式の主部に入る。その付点リズムが楽章の統一リズムとなり、躍動に満ちた展開を織り成していく。**第2楽章**（アレグレット）ではタータタ・ターターという行進曲風のリズムで楽章全体を統一する一方、対照的なエピソードの挿入やフガートの導入などが多様な変化を作り出す。**第3楽章**（スケルツォ、プレスト）は跳躍的な主題を持つスケルツォ。引きずるような動きのトリオが対照される。**第4楽章**（アレグロ・コン・ブリオ）は激しいエネルギッシュなリズムで邁進する高揚感溢れるフィナーレである。